こうした偏執と虚妄は、過去の多くの史観に見聞する所であって、ある時は英雄（多量虐殺の遂行者であり元兇である）のみの史実となり、あるいは、政治的、権力支配の変換のみの描写で終り、近世には、弁証法的唯物史観のそれの如く、各々その特徴とする所は、時の支配者、又は政治的指導者と称する強権把握者にとって、最も好適な方向への歪曲を常とするのである。

もとより史実は多様であり、多種多源であって、どのような時代と云えど、その一つとして綜合的結果ならざるはないのである。

で筆者は、ダーウキンの進化論に於ける一元性に対して、多大の疑問を禁じ得ないし、むしろ、この学説は、すでに過去のものであり、十九世紀的な、前近代性とその特徴を持ったものであると思える。

人類史二十万年（五十万年、あるいはそれ以上とも云われる）に及ぶ人類の過去を偲び、今後繰り延べられるであろう、人類の未来に思いを馳せる時、たった今の、この現実の各個人が、この身この儘、過去による結果であり、未来に向けての原因ともなる意義に於て、この現実の個体は、綜合的史実の一事象であって、ここには多元の綜合と、無限数の素因の、融合による一体化である『一』を見得ると共に、無限への『一』の素因を、あらゆる角度を通じて描き、綜合の原理に於て、美をとり醜を捨て得るであろう。

かくて、人類史が人間に依ってなり、人間性によって未来する事を確認すると共に、人

類史は、人間性のみによって創造された過去であり、人間のみによって、そして人間なればこそ、創造される未来史である事を、人間的特殊性（生物内に於ける人類的個性）に於て確信するものである。

七、結　論

以上、各項目別に列記したものの、これ等のすべてを結合融和したものが人類史であり。もともと綜合的なものなのであるが、便宜上、仮りに、各分野に分けて記述したまでのもので、相互に交流し合う所に、史実としての実体がある。その根元を探ねるなら、人類蒼生の当初から、持続しつづけた四大本能と、意志し意識活動する、そのものとの相互の交流と、群結融合（集団同時活動）が、因となり果となって、現象したものである。その内の如何なる部分を捕えて見ても、単なる因果律を持ってしては、測定する事の出来ない、多元性と無限の因子を見出さない訳にはゆかない、質と量によって人類史は作られている。

こうした、史実を構成する各時代の部分的要素は、結局は、各個人にまで帰納する事なしには、その因子の究明は為し得ない、その個人は現時点に於ける自我であり、その自我は、過去の永かった人類史の表徴であり、未来への一因子なので、この自我は、本能を所有する意志し意識活動する、この形態を現に持つ、肉体の個であり、常に創造を余儀なく

されている生態でもある。

この個は、常に無限に拡大する水平思考を基本に、連帯性によって集団化し、民衆のエネルギーを構築しつつ、社会を構成し経続する。

揺れてはおさまり、かりたてられては沈潜する中で、時には鬱屈し、あるいは屈従する事があろうとも、時至れば、表面に尤も強烈な衝激を与え、権力史に節々をつけて来た、これは地下に蓄えられた底力のすることであり、権力支配のある所では反覆して止まない、民衆の所有するエネルギーである。

このエネルギーは、共有する人間性と、禍福をも共にしようと望む、民衆相互の連帯意識の昇揚であるとも云える。

彼等民衆の生活点には、広範に見た時、そこには挫折はなく、死滅もなく、根気そのものの努力と、模索する行為と創造がある。

この庶民自身の常に遂行している創造のための行為は、相互の交流と連帯の中に文化を築いてやまない、永遠を約束するものである。

なお、本能と意志との関係や、本能そのものの相互間の在り方を、参考のために記述して見る。

(イ) 相補性原理

無限の因子としての四大本能の各個は、もともと一個体の質と量を構成する、そのものの発展及び交流、進化の因子であって、個性の発生と共に、内在する不可分の実在である。

この関係は、素粒子の構成に於ける、原子構造内の中間子的存在とでも云えるのであろうか。生物体、特に動物中の人間と云う、個性の発生から終末に至るまで、肉体と不可分の関係にある、形態の実在に伴う、本能と意志の相互関係に生れる無限の因子である。

併も人間は、その頭脳的発展と進化が、本能そのものと不可分のものとして融合し、調和を保ちつつ『一』の個性の中に溶融し、各個人の個性を形成する。この個性ある個々が、本能を媒体として個体を、そして集団を維持発展せしめる。

即ち社会が構成されるのであるが、これこそ、史実を構成する最大の要素であると云い得る。では、本能そのものの相互関係は如何なる構成になるのであろうか。

それは現代物理学上の、素粒子論に於ける相補性原理によって、説明を求める以外にはない関係にある。

即ち『二つの量が同時には決して正確に測り得ない』ー、藤岡由夫著、物理学ノート、一三五頁参照……の不確定性を見出し得るのである。

一例として、好奇本能が極度に発揚された場合の例として、往々にして学者、技術者、その他の間に、発明、発見、又は研究等の為めに、寝食を忘れる事がある。為めに学究者

の妻女から、欲求不満の声を聞く事は、巷間によく見聞する所である。

これは、好奇本能の一方的強度化により、種族保存の本能が、時に委縮の状態を呈した事を意味する。こうした場合よく現出する事象である。

又、コロンブスのアメリカ発見の冒険旅行は、同じく好奇本能の強度化が、自己保存の本能を痲痺せしめたものであり、なお亡夫亡妻の為めの自殺行為は、種族保存の本能の一時、あるいは継続的高度化による、自己保存の本能の亡失的現象であり、又児童の溺死を救助する為めに、自己の生命を断つに至った実例は、枚挙にいとまない程の数に上っているが、これは、社交性本能の一分野である相互扶助的行為が、自己保存の本能を抹刹した現象と云える。

又異性を求める余りに、他人を忘れ、自己をも忘れて、一途に思いをこらす事があり、その為め、反社会的行為にまで発展する事もある。これは種族保存の本能が、他の三大本能の影を薄めた実証である。

等々、四大本能の個々の量と質を、個として測定する事は不可能であり、人間そのものの個と時と処とを一つの『場』として、その中から測定する以外にない相補性を持ち、不確定性のものである。

なお、こうした関係は、意志し意識活動する場合の、理性と本能の関係からも見る事が出来る。

それは、理性の発達が本能活動を制禦する事がある、それと、その逆の場合の、本能そのものの極度な活動状態にある時は、理性は姿をなくしたものの様になる事である。

これ等は、理性と感情の関係にも、類似現象を現わすものでもある。

要するに、以上記載した事は、各本能相互間、及び、意志し意識活動するものとの相互の関係が、共に相補的な不確定性を意味し、古典物理学的解釈、即ち巨視的現象の、それも表面的な観察を主とする、否それのみによる、前世紀的な唯物論に於ては、解明し切れない現象である。

以上、略述した、意志（この場合感情、記憶をも含めて）と理性と本能は、人間的個性の中に溶融する、人間性そのものの一要素である。併もそれらは、個人の個性構造の要因でもあり、人間そのものの発展と進化と活動に於て、常に流動して止む事を知らない、作用量子となって、無形の儘、継続され進化し発展する。

これらのものに肉体をも含めた、この綜合性と融一性こそ、一切を決定する基本的実在である。

なお、唯物論的哲学に於て、その主軸として描かれている、対立観及び対立の統一的感覚について、以下書き加えておく。

(ロ) 相対の融合と対立の統一

対立の統一的方向、及び対立的事象は、万動物の生存理由としては、異種属間に生起す

る事象であり、主要なものとして考えられる。が、人間の社会生活では人為現象であり、人間の各個意志による結果として生じ、併も習慣化された、無防備の心境に対する統制以外ではない。

そこに産れる秩序も平和も自由も、対立的環境に馴育されたものであり、自己喪失か、追髄、屈服の現象であって、歪曲された人間生活以外ではないのである。

対立を生育する所に平和はなく、真の意義からの秩序も自由も、統一と云う強制を伴うこと以外に、その存在を維持することができない。

これに反し、相対を意識する所には、尊重と理解の倫理が生育し、融和が産れる。

自由と平和は、相対の尊重にこそ真実があるのであって、対立を意識し、それを統一する所には、強制と巧利性を必然のものとして描き出してくる。

それ故に、これが政治なしには保持し得ない秩序であり、平和でもある。と云うことは、野蛮の継承以外ではない、と云うことにもなる。

およそ人間生活上の対立とは、人間の未だに持つ野蛮な習性と遺風と、人為的で巧利的以外ではない秩序の産み出す、必然の意識行為であり、末だに脱皮できずにいる、人間生活上の蒙昧現象であり、野蛮であり、悲喜劇の大いなる原因にもなっている。

要するに対立の統一とは、支配又は強制による統一と云う、倫理的無秩序の表現以外ではなく、国際、国内をとわず、社会生活上の病患であり、延いては強権により、あるいは

軍事力による統一と云う、この無法、無残なるものを、強制や武備のある限り認めねばならぬ、と云うことは、人が人を殺ろし、人が人を掠取することを認めることであり、あまつさえ、戦争を当然のものとする、この原理をも含んでいる。

私は人間性を尊重し、人間そのものを限りなく愛する。これは、人間そのものの持つ、本源のものを美と感じ、愛するからであり、相対の融合を信ずるからにほかならない。

これは言い方をかえると、本能論史観に於ける、社会性と相互扶助の、理性による意識化とその習性化によってこそ、具現化されるものである。倫理も平和も自由も、これを根拠とすることなしには、その環境の実現は不可能であり、創造的意欲による行動性こそ、実現を可能にする唯一のものでもある。

即ち相対的融和の感覚を意識化にまで止揚し、創造性を持つところに、可能性が約束され、教育はこの任務遂行のための鍵となる。

人間の生存には、政治以前を実証するそのものの性格と、その個性の中に育くまれる、人間性そのものに依る、生育と歴史が大部を占めている。

親が子を産み、生育する、この相対性を忘れてはならない。又女性と男性、そして人間の存在そのものは、対立を求める質のものではなく、融合を求め合う、相対的な存在以外ではない。この融合を立証するものに愛情がある。

この愛情は、矛盾の統一や対立の統一という、一種の争奪や強制の中に生ずるものでは

なく、融和を求める行為の基点を成しているものなのである。この場合、若し対立を意識するとしたら、これは巧利的感覚か、欲求不満、あるいは競争心理による演出であろう。

要するに一切の秩序は、習性化された相対の融合に於てこそ、強靱である筈である。が、現実には、社会的病根が人間性を破壊し、無秩序を秩序とする、対立の統一と云う攻撃的勢力を、あくまでも排除する、この相対の融合こそ、あらゆる生物の、同種相互間に於ける秩序の基本であり、健康な状態に於ける人間生理の結果でさえある。

これに反し、対立の統一とは、史相な病理を基本にした、意志により歪曲された方向であり、強制によって作られる秩序の必然でもある。その基本的な詭弱さを内包し、その宿命から遁れ得ないものでもある。

対立を感じ、あるいは作造するところに、真の意義に於ける平和も、自由も秩序もなく、相対を思うところに、尊重と理解と平等の倫理が生じ、融和が産れ育てられる。

この自然そのものが附与し教示する相対の融合こそ真の秩序である。これとは対象的な対立（矛盾）の統一とは、人為による無秩序の最たるものであり、常に混乱を内包する蒙昧と、野蛮の精神的落し子以外ではない。

それから脱皮することのない、延いては平等と自由と平和を疎外する人間生活が、獣類にも劣る、なまなかに精心を持つための、哀しむ可き、軽蔑するに値いする習性の作り出す迷路とも云えるのである。

要するに、対立そのものの、克服と破壊と解消なしには、社会的に、それが国際的にも相対の融合も完璧なものとは云えない。

即ち人間の弱さや誤ち、ずるさによって作られた、対立の解消こそ、人類の本源的な希望であり、解放の理想である。

意志によるものは、意志による意識活動に於て、その本源を究め、克服し、破壊し、そして創造の方向へ転嫁しなければならない。

これがなされてこそ、人間生活は、この長年月の間継続し、且つ現になお前途を暗らくする迷路から離脱し得るのである。

この常に人類の、そして社会の前途を暗らくし、混乱させ、相互争闘する、無秩序の秩序を維持し、人間性を歪曲するものは誰なのか？。

小児は喧嘩してから五分も経たない間に『遊びましょう、』と仲直りし和解する、然るに教育は小学校に於て、適者生存とか生存競争などと云う言葉によって、さながら異種属に対するかのように、同種属の人間間に訓育し、中学、高校、大学と、権力体制によって作られた、軌道上を歩るかせられ、資本主義や権力機構、あるいは権威の擁護行為を強制され、その中だけでの生活を強要され、対立を当然のものとし、それ故にその統一的規制が必要である、と云う理由づけを持って、政府、政党の教育行政が続行されている。

これは対立を教育や政治によって醸成し、誘発し激化して統一を求め、それによって、

利己的な利益を得ようとするものであり、社会は、そして人類は、この野蛮な遺風でしかない無謀をゆるしてはならない。

これ等の人類全般に対する無法と暴虐を常套とし、それによって維持されるものに、資本主義があり、強権思想があり、共産党政治や、その他一切の政党政治は同じ性質のものである。

(ハ) 市民運動と水平思考

民衆はその生活点に於て、常に創造のために模索する行動があり、過去の歴史はこれを根底にして作られて来た、そこには挫折はなく、死滅もなく、根気そのものの努力と模索する行為が、社会生活に文化に、創造性ある思索と行動を積み重ね、その貢献によって人類の歴史は現在に至り、未来をも描いている。

この歴史の当初に於て、庶民自身の創造になる農作業、工、鉱業等々に、個人の創造的意欲があづかって力あった結果である。例えば一個の土器や石器、そして現実には一本の釘の創造がなかったら、日本家屋は現在のように作造されているかどうか？　この釘の持つ庶民性こそ、民衆相互の連帯と共助共有を教示している。

この庶民自身の創造になる庶民文化がなかったら、現実にどれ程のものが残るであろうか？　そこでの文化は皆無と云える。紙も糸も板も、庶民自らが働らき創造することによって、その底に流れる人間性と云う、連帯性（作用）が交流して結集し、全体が生存する

と云う水平事象が、権威によって占有され、権力の壟断によって歪曲され、労働者、農民、延いては市民そのものの生存するそのことが、生かして貰っていると云う逆現象を呈し、権力や権威を楯に生きている寄生虫から、生かされていると云う錯誤が、民衆の日常生活を左右している。

これが歴史的に馴らされた垂直思考となって、構成されているのが現社会であり、現に存続している、権威を楯にした権力体制である。

これに対する民衆の抗争は、その偽瞞性と謀略を意識し、自身と彼等とが、同じ人間であることを認識した時から始まったが、今までなされた種々の抵抗と変革は、結局は大衆を置き去りにし、それと離反したところのものであって、単なる権力の推移か、権威の交替でしかなく、大衆の自覚と納得からは余りにもかけ離れた、権力によって規制されたものでしかなかった。

これと同じものが、現今、平等感の如く装う民主主義や、議会主義と称するもので、これもその例に洩れず、政党や議員の奪権闘争や維持のための行為以外ではなく、一部の利益代表であったり、巧利性そのもののための猾智に埋没することに終始し、しかも保守化が強要される、ここには純粋で広範な意義からの、社会性や人間性そのものを思考した何ものもない。

およそ権力機構は、ちょっとした切っかけを手蔓るに、政治や社会批判の規制に乗り出

す、常に権力側の福祉利潤が根底にあって、そのため昨今では検察制度そのものも、三権分立は口術で、時の権力支配のためにする、庶民規制のための道具でしかなく、戦前の天皇絶体の法制に似てきた。

もともと警察や軍隊（自衛隊）は、時の権威を笠にきた権力者の擁護機関でしかないのだが、昨今の警察や機動隊は、その本質を露骨に暴露してきて、政府や自民党の私兵化的存在になってきつつある、支配し規制する強権思想を背景に、規制し、操従し動員し、時にはマスコミをも組み込み利用して市民を煽動する、この野蛮と暴力を政府は勿論、マスコミも当然のものとしてきたのである。これを垂直思考による、習慣化の構成する社会と云い、ここに現世の価値感に於ける非人間性がある。

この人間否定の社会や生活に対し、人間的な、余りにも人間的な純粋さを求望するが故に、人間性の回復と、人間解放を原点として常に意識するが故に、そこを生存理由の出発点として意義づけ、多様な創造の世界に踏み入ろうとする時、それが例え試行錯誤であろうとも、止むに己まれず、実行しずにはいられない衝動を感じ、平和と自由と、正義と真理のためにする行動の模索が、創造の名に於て、青年の心を駆り立て、例えそれが半永久闘争の質のものであっても、老いることを知らず闘い続けるであろう。

こうしたことは、過去の歴史の根底に流れる、人間なればこその、美しい創造のための模索であり行為なのである。ここで常に経続され行為されるものは、人間性を原点とする

多様な創造の世界であり、統一し枠にはめ規制する事ではなく、無限に横に平面的に拡大され、それと同時に各個性の発展は、個性的な差異と人間性に於ける連帯を、美しく調和したものを生み出す、創造の世界がある。

この意義に於て、人間性こそ最高最大の価値であり、これを意識し行動化する起点に水平思考がある。

この思考こそ、無限に開らかれる、全人類を仲間としての連帯の世界を実現するものであり、小にしては隣人の住む地域でもある。

この現実の生活点に立って、凡らゆる事が考えられねばならぬ、そのための主張が、闘い以外にない場になっている現社会で、人間回復と人間性奪還を原点とした、個人の自覚と共に多数の自覚を求める、市民運動がある筈である。

労働者は生産点の其の場にあって、自ら生産するものが、仲間を殺ろす以外ではない、戦争の予備品を生産しているのではないのか？　戦争に協力する結果になっているのではないのか？　そして、それが妻子や家庭、隣人との生活点にたった時、平和や自由と人間性との関係をどうすればよいのか？、これは労働組合が政党の単なる下部機構であったり、値上げや待遇改善だけの、商取り引きの道具以外ではない現在、どう考えたら人間全般のためのものになるのか？。

又、市民は各自の持つ立場にあって、商人、中小企業、主婦、青年達が、何のために何

の理由で、誰れのために生きているのか、その生活に自立と創造の自由と保証があるのか、平和に不安はないのか、基地公害や空海汚染の生活破壊や生命不安は、誰れが作るのか、誰れがそれをただちに無くそうとしないのか、企業優先の、一部階級のための一方的暴挙が、庶民を無視し犠牲にするこの事実に対し、黙っていてよいのか、この社会生活の破壊と人権無視の政治に、易々諾々と従っていてよいのか？。

又沖縄や未解放部落、それと朝鮮の人々に対し、戦前から戦後、日本の経済繁栄に寄与する所多大のこれ等に対し、その犠牲と蹂躙に目をつぶり、理不尽な疎外や蔑視を伴なう、加害者としての立場にあることを、考えてみたことがあるのか？。

権力や権威は常にこうした事を生育してやまない、彼等にとって民衆は、その巧利性と利用の対象でしかない、この野蛮な歴史的事実を、どうしたら無くすことができるのか。

又学生は、君自身が加害者としての立場になり得るし、人間性を教育的に歪曲されてゆく被害者でもある、その上両親や周辺の生活の在り方と影響に於て、市民としての生活もあり、就学するその学校は、君達を企業の隷属物か、機械の附属物化に仕上げる場所になっていたり、知識の独占や、権威の擁護維持のための道具にさせられたりしているが、これでよいのか、ここには人間を人間として育成する何ものもなく、企業のための訓練所以外ではない、それはさながら、企業や施設の附属品としての育成であり、そのために規制され、個人の創造性は埋没されてゆく。

又一般庶民として、いつとなく戦争準備に巻き込まれ、かつてのように、戦争当時の加害者に作り上げられたりする、すでにベトナムに向けて日本製の爆弾が、日本人の手で運ばれ、ベトナム人を殺傷している、加害者になっているのだが、二十四年以前の記憶はある筈である、その当時、戦死戦傷、戦災疲弊、飢餓、原爆被災のような被害者にもさせられた、あの権威をかざす権力支配や、政府による偽瞞と、煽動と操従と動員に乗せられた過去を、現実に引き較べて考えて見た事があろうか？。

こうした野蛮と無法と惨虐と殺害は、再たびあってはならない、そのためには、何を考え何をしたらよいのか？。

この危惧を現実のものとして、作り上げつつある政府や、現実に死の商人として仮面を剝ぎ、武器製造に狂奔する企業に対し、人間である事の証しを立てる意味からも、彼等権力体制側の、作り、育て、教育しつつある、垂直思考故に産まれたこの社会的犯罪と、人間的不合理のかもす、矛盾と野蛮から脱皮し、人間性と云う原点に立つ水平思考に、そしてその内面に於て、対決し克服し脱皮する、凡ての人間を同じ仲間としての人間の社会に、回帰しなければならない。

これは、平和と自由と、人間性奪還や人間回復のための闘いに参加することであり、現在に生きる人間として、尤も美しいものであり、尤も良い生活である筈である。そのためには、常に人間性と云う原点に立って、それを出発点とする、挫折をしらない根気と、断

えざる創造のための行為がなければならず、例えそれが行動の模索に終ろうとも、広範に実践されなければならないであろう。

これをなし得るもの、それは人間解放と云う、現実を直視しての運動であり、市民感覚の水平思考化のための、創造的な闘い以外にはない、これこそ、市民運動の基本的理念であると私は思う。

青年よ！　君は原理を叫んで立ち上がるがよい。

教育者よ！　科学者よ！　宗教家よ！

君達の選ぶものは、相対の融合と云う水平思考によるものか、それとも対立の統一と云う垂直思考によるか、君達こそ、本源のものを持たねばならぬのだ。

後の世を荷負う少年や青年達に、対立と闘争の野蛮を教え、その解消のための理想を持って、より高度の文化と、人間形成と人間的自覚のために、人間社会の完成を求めるなら、そして真に自由と平和と敵のいない世界を願うなら、相対の融合なしに何がなし得よう。

みんな人間の仲間なのだ。

以上で筆者の哲学感であり、史観としての問題の提起は終った。が、より以上のものを得たいために、忌憚のない、諸賢の御批判を得て、将来の研究をより深めたいものと思います。

一九七十年三月

著　者

……註

参考資料として、引例記載したいと思う事は多々あるけれど、特にこの書に必要と思われる部分を摘記すると左記の通り。

河出書房発行、藤岡由夫著、物理学ノート、の原子及び原子構造その他の解明、及び同著よりの参考引用文意は……。

『古典物理学的な因果の関係を捨てる可く余儀なくし』八四頁より八五頁、その他三八、四二、六七、一三〇、各頁参照

『原子核内では中性子と陽子とが密集し、之等が固く結合している』　一〇九頁

『核内の多くの粒子の複雑な運動に蓄えられ』　一六七頁より一六八頁

『作用量子hの存在の事は第一日に云ったが、普通の巨視的原象では之れを無視している』　一四七、三八、三九、一三四、各頁

不確定性原理、三一、三八、各頁

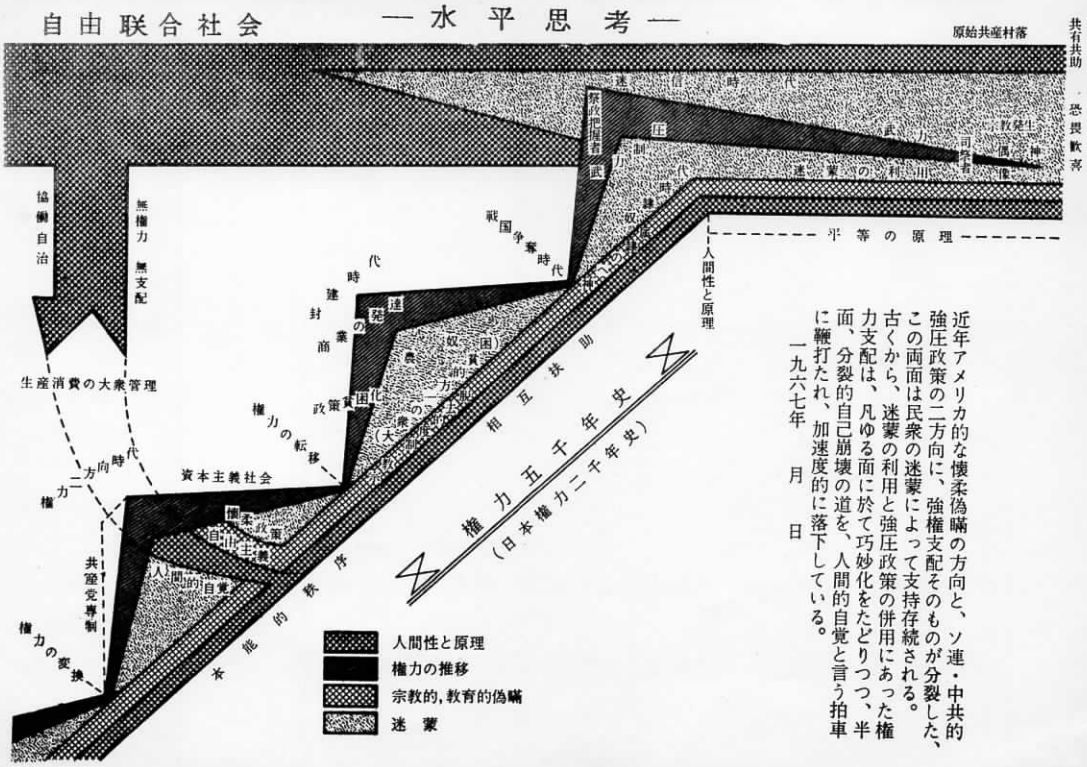
相補性原理と人間の理性及び本能に関し、四四、四五、一三九、一七四、各頁

『相補的な量に不確定性の起る所似なのである』　六五頁

『或二つの量が同時には決して正確に測り得ない事を意味するものである』

一三五頁

以上の外湯川秀樹博士による、非極処場の理論は、多大に啓発を受ける所あり、学び且参考とする所であつた。



近年アメリカ的な懐柔偽瞞の方向と、ソ連・中共的強圧政策の二方向に、強権支配そのものが分裂した、この両面は民衆の迷蒙によって支持存続される。古くから、迷蒙の利用と強圧政策の併用にあった権力支配は、凡ゆる面に於て巧妙化をたどりつつ、半面、分裂的自己崩壊の道を、人間的自覚と言う拍車に鞭打たれ、加速度的に落下している。

一九六七年　月　日